



RIETI Discussion Paper Series 22-J-037

褒め方、叱り方が子どもの将来に与える影響— 日本における実証研究

西村 和雄
経済産業研究所

八木 匡
同志社大学



Research Institute of Economy, Trade & Industry, IAA

独立行政法人経済産業研究所
<https://www.rieti.go.jp/jp/>

褒め方、叱り方が子どもの将来に与える影響—日本における実証研究*

西村和雄（神戸大学／経済産業研究所）*

八木匡（同志社大学）**

要旨

親が子供に対して、声かけと応え方をどのようなものにするか、特に、子供が問題行動をとったときの注意の仕方、好ましい行動をとった時の励まし方は、子育てに関する著作や多くの論文が重要視していることである。

本論文では、日本人に、実際に多くの親が行うと思われる叱り方、褒め方を取り上げ、子どもの時の叱られ方、褒められ方と成人後の自己決定度や安心感、さらに、長期的な視点で物事を考える習慣や倫理的行動に与える影響を調べた。長期的な視点で物事を考える習慣は、行動経済学における双曲割引の度合いと関連があり、賞罰が、双曲割引の度合いを高め、遠い将来よりも直近の利得を強く意識するような影響を与えるとするなら、それは倫理的行動にも影響を与えているであろう。

キーワード：賞罰、自己決定、安心感、倫理観、双曲割引

JEL Classification Codes : I29, J13

RIETIディスカッション・ペーパーは、専門論文の形式でまとめられた研究成果を公開し、活発な議論を喚起することを目的としています。論文に述べられている見解は執筆者個人の責任で発表するものであり、所属する組織及び（独）経済産業研究所としての見解を示すものではありません。

※ 本論文は、独立行政法人経済産業研究所におけるプロジェクト「日本経済社会の活力回復と生産性向上のための基礎的研究」（代表：西村和雄ファカルティフェロー）の成果である。日本学術振興会の科学研究費 JSPS 科学研究費基盤 S # 20H05633 および基盤 B #16H03598 の研究支援に感謝する。また、本論文は、経済産業研究所の研究会で報告した際のコメントを基に改訂した。出席者の方々にこの場を借りて感謝したい。

* 神戸大学計算社会科学センター特命教授、独立行政法人経済産業研究所 FF

** 同志社大学経済学部教授

1. はじめに

子育ての方法については、昔から、多くの議論がある。子育てのタイプを分類した理論としては、アメリカの発達心理学者 Baumrind (1967, 1968) によるものがよく知られている。Baumrind は、子育てのタイプを権威型 (Authoritative)、専制型 (Authoritarian)、迎合型 (Permissive) の 3 つに分け、その中で、最も効果的なのは、権威的な親であるとした。その後、Maccoby and Martin (1983) は Baumrind の 3 つのタイプに、4 つ目のタイプである放任型 (uninvolved) を加えた。

Aunola & Nurmi (2005)、Smetana (2017)、および Cole et. al. (2021) では、子育てタイプによって、ルールを破る行動がどのように規定されるかについて分析を行い、Hoeve et. al. (2008, 2009) は子育てと非行との強い関係性といったように、子育てタイプによって子どものパフォーマンスが大きく影響を受けていることを示唆している。特に、Smetana (2017) および Cole et. al. (2021) では、育児は多面的で、状況に応じて決まるものだという「領域別 (domain specific)」モデルを用いた議論を行っている。

Nishimura and Yagi (2017) では、子育てを、支援型 (Supportive)、厳格型 (Strict)、放任型 (Easygoing)、迎合型 (Permissive)、虐待型 (Harsh) の 5 タイプに分けて分析し、支援型の子育てが最も良い結果を生むという結果を導いている。

親は子供に対して、日常的な表情やボディランゲージによるものを別にすれば、声かけと応え方でコミュニケーションをとる。それをどのようなものにするかによって子どもの成長は強い影響を受けると考えられる。特に、子供が問題行動をとったときの注意の仕方、好ましい行動をとった時の励まし方は、子育てに関する多くの著作や論文が重要視していることであり、どのようにすることが良いのか多くの親が悩む点である。

声かけと応え方で多くの議論の的となっているのは賞罰である。Stormshak, Bierman, McMahon and Lengua (2000) で主張されているように、子どもに罰を与えることが良くないというのは理解できる。しかし、Kohn (1993) によれば、子どもに罰を与えることだけでなく、子供に褒美を与えることも良くないという。褒美は、子どもが欲しているものを使って行動を支配する手段となり、長期的には罰と同じ意味をもつことになる (Ryan and Deci (2000))。

学校教育では明らかな褒美や罰を与えることは少ないが、先生は、常に、生徒を評価している。指導に従う生徒や成績の良い生徒に高い評価を与え、指導に従わない生徒や成績の悪い生徒に低い評価を与える。これは、賞罰にひとしい。

理想的な子育てや生徒指導ができればいいのだが、多くの親や教師は、実際は、褒美や罰を与えないまでも、子どもを褒めたり、叱ったりはする。しかし、どんなほめ方をするか、どんな叱り方をするかは親や教師によって違っている。

Lee, Kim, Kesebir and Han (2016) によれば、親と子どもの両方が正確にほめることを認識することが、こどもの学業成績や心理的な健康にとって最適な結果をもたらすことになる。一方、Brummelman, Crocker and Bushman (2016) によれば、過大なほめ方

は、ある種の子供のる気や自己価値感を低下させる。

Mueller and Dweck (1998)によれば、知能をほめられた子供は、努力を褒められた子供に比べて、過程よりも結果を重視する傾向がある。さらに、先に挙げた Kohn (1993) や Ryan and Deci (2000) も含め、褒めることは「これをしなさい、そうすればこれが手に入りますよ」という意味で報酬と同じく、生徒をコントロールしようとするものであり、叱ることは「これをしなさい、さもなければこうしますよ」という意味で、やはり罰と同じであるという見方がある (Dreikurs (1958), McKay and Dinkmeyer (1989))。叱ることが良くないというのはともかく、褒めることも良くないというのは本当であるか。そして、良くないとすれば子供にどのような影響を与えるからなのか。

このような問題意識から、我々は、叱ること、罰を与えることとともに、褒めること、褒美を与えることが、成人後の子供にどのような影響を与えるかを実証的に検証した。本論文では、理想的な注意の仕方や励まし方がどのようなものかという議論には深入りはせず、実際に多くの親が行うと思われるしかり方、褒め方を質問し、日本人 2,052 人からの回答を分析して、子どもの時に受けた、叱られ方、褒められ方と成人後の自己決定度や安心感との関係を調べた。

Nishimura and Yagi (2017)では、子どもの自立を促す支援型子育てが、成人後に、精神的安定、所得、学歴のいずれにおいても、他の子育て型に比べて、高い結果が得られており、Nishimura and Yagi (2019)では、所得や学歴に比べて、人生における自己決定度が、幸福感を左右するという結果も得られている。自己決定度については、Ryan and Deci (2000), Soenens and Vansteenkiste (2005)において、その重要性が議論されている。したがって、本研究でも、回答者の安心感とともに自己決定度を測ることにはそれなりの意味があるであろう。

本稿では、さらに、叱ること、罰を与えることとともに、褒めること、褒美を与えることが、成人後の長期的な判断と倫理的行動に与える影響を分析する。これは行動経済学における双曲割引 (Hyperbolic discounting) と関連する。

双曲割引とは、今日と明日の違いは1年後とその翌日の違いより大きいというものである。その結果、「1年後 (遠い将来) に待つことはできると同じようには、今は待つことができない」という性急さの度合いが双曲線型割引関数 (Hyperbolic discounting function) の形で表される (Ainslie (1991), Laibson (1997) 等)。このことは、現在1年後にダイエットを始めることを計画していても、実際に1年後になると、計画したダイエットと矛盾する行為、例えばケーキを食べるといった、意思決定の時間非整合 (time-inconsistency) を生む。Angeletons et. al. (2001)では、米国の資産データを用いた実証分析とそれに基づくシミュレーション分析によって、消費と所得との関係性を双曲割引モデルによって説明できることを示している。Ainslie, G. (2011)はさらに双曲割引と倫理感との関連性を指摘した。

我々は、賞罰が長期的な判断と倫理観に影響することを分析する。もし、賞罰が長期的な利得よりも短期的な利得を強く意識する性向を強めるのなら、賞罰が双曲割引の度

合いを強めることを通じて、倫理的判断に影響するとも解釈できるかもしれない。

以下の第2節では調査の概要を、第3節では、回答者が記憶している親に注意をされた時の罰や言葉と現在の自己決定度、安心感の大きさに何らかの関係がみられるかを、第4節では、回答者が記憶している親に認められた時の褒美や言葉と現在の自己決定度、安心感の大きさに何らかの関係がみられるかを調べた。第5節では、賞罰がもたらす長期的な判断や倫理観に与え、第6節で、総合的評価を与える。第7節はまとめである。

2. 調査データの概要

本研究で用いるデータは、2021年3月8日から2021年3月11日にかけて、調査会社NTTコムオンライン（NTTCom Online Marketing Solutions Corporation）を通じて実施したインターネット調査で得られたものである。調査対象者は、全国20歳以上70歳未満の男女個人であり、性別・年代で人口構成比に合わせて割付回収を行っている。配信数は27,391件で、回収率は7.5%であった。

データ特性は、次のように整理される。標本回収数(度数)は2,052であるが、税引き前個人年収額については、未回答数が745あり、分析で用いる有効観測個数は1,307である。税引き前個人年収の平均は477.8万円で、標準偏差は382.8万円となっている。性別分布は、男性が50.1%、女性は49.9%であり、男女ほぼ同数である。婚姻状況は、未婚41.1%、既婚52.3%、死別・離別6.6%である。平均年齢は46.4歳、標準偏差は13.8歳で、20歳以上69歳までとなっている。

子供のいる回答者は46.3%で、いない回答者は53.7%である。また、大卒以上の最終学歴を持っている回答者の比率は52%である。

3 叱る言葉とその影響

本調査では、子どものときに親に叱られた記憶に関する質問に対する回答を使って、調査で用いた質問の中から、罰を課された、叱られた、やんわりとたしなめられたという3つの注意のされ方で、回答者をグループ分けした。まず、「親に注意されたときの言葉として、”一番記憶に残っている”のは、次のどれに近いですか」という質問に、「どうしてできないの」や「次は頑張ろうね(ちゃんとやろうね)」を選んだ回答者のグループをそれぞれ「どうしてできないの」のグループ、「次は頑張ろうね」のグループとして定義した。

次に、「罰を課せられた」というグループを定義する。「あなたが小学校から高校までの間で、あなたが、言いつけを守らなかったとき、親の反応はどのようなものでしたか?」という質問で、「罰を課せられた」、「叱られた」、「どうしたら言いつけを守れるのかを聞かれた」を複数回答で選択してもらい、そこで、「罰を課せられた」選んだ人で、先に定義した「どうしてできないの」のグループにも「次は頑張ろうね」のグループにも属していない人のみを、「罰を課せられた」グループとして、定義した。この

ように選んだ複数のグループに、同じ人が重複して属することはない。

以下では、「罰を課せられた」、「どうしてできないの」、「次は頑張ろうね」のグループ間の比較をする。

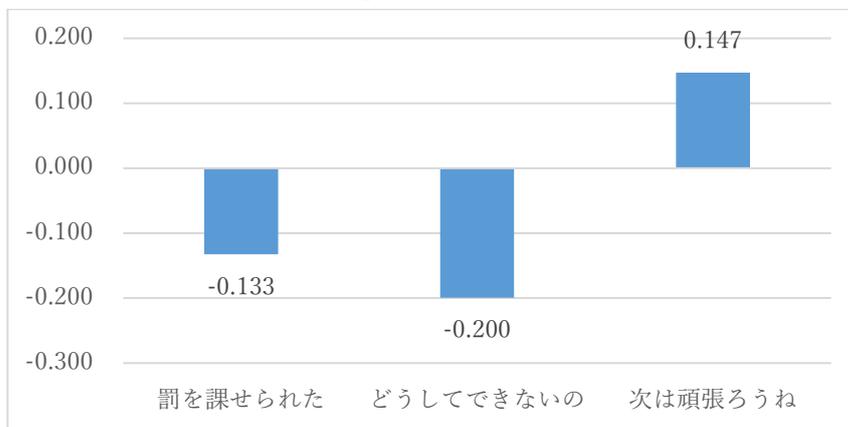
叱る言葉と「自己決定度（自立心）」

本調査では、「中学から高校への進学先は誰が決めましたか？」という質問と、「高校から大学への進学先は誰が決めましたか？」という質問に対して、1) 全く希望ではなかったが周囲のすすめで決めた、2) あまり希望ではなかったが周囲のすすめで決めた、3) どちらとも言えない、4) ある程度自分の希望で決めた、5) 自分の希望で決めた、という5つの選択肢による回答を得ている。さらに、「初めての就職先は自分で決めましたか？あなたに最もあてはまるものをお答えください。」という質問に対して、1) 全く希望ではなかったが周囲のすすめで決めた、2) あまり希望ではなかったが周囲のすすめで決めた、3) どちらとも言えない、4) ある程度自分の希望で決めた、5) 自分の希望で決めた、6) 就職したことはない、という6つの選択肢による回答を得ている。これらの回答を因子分析にかけ、自己決定度を作っている。

図1で示されているように、回答者の自己決定度を比較すると、「次は頑張ろうね」は、0.147で、最も自己決定度が高かった。「罰を課せられた」が-0.133で、「どうしてできないの」が-0.200であった。指標は、因子分析によって標準化された得点を用いているため、平均が0となるように作られているため、負の値を取り得ることになる。また、度数は自己決定度の作成における欠損データが存在したことにより、「罰を課せられた」が80、「どうしてできないの」が147、「次は頑張ろうね」が119であった。

この結果により、「罰を課せられた」の平均値と「次は頑張ろうね」の平均値の差は、5%の有意水準で統計的に有意ではなかったが、「次は頑張ろうね」の平均値と、「どうしてできないの」の平均値の差は、有意確率2.5%であり、5%の有意水準で統計的に有意であった。「どうしてできないの」と叱ることに比べると、「次は頑張ろうね」と励ます方が長期的には自己決定度を高めることになる。

図1 叱る言葉と「自己決定度」



叱る言葉と「安心感」

本調査では、心理的幸福感を測定するため、Hills and Michael (2002)で提示された質問リストを用い主因子法による因子分析によって因子を抽出した。この因子分析の結果、心理的幸福感の因子として、「前向き志向」、「不安感」と解釈できる因子を得ている。不安感に対応する質問は、表1で示されたとおりである。

表1 不安感に関わる質問

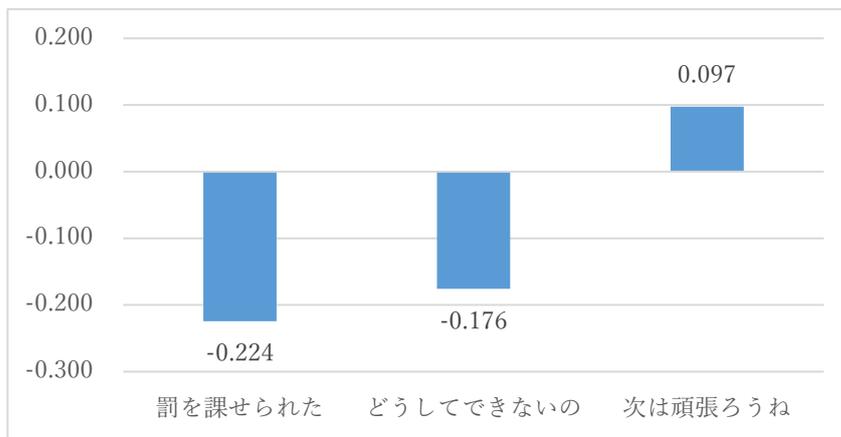
あまり自分の人生を思うようにコントロールできていない
この世界が素晴らしい場所だとは思わない
自分がしたい事と自分がしてきた事の間には差がある
過去の幸せな記憶があまりない
人生に特別な目的や意義を感じない
自分が魅力的だとは思わない
現状に必ずしも満足していない
あまり健康的でない
将来に対して楽観はしていない
他人と一緒に遊ばない
眠れない

それぞれの質問に対して、1) まったくそう思わない、2) そうは思わない、3) どちらかといえばそうは思わない、4) どちらかといえばそう思う、5) そう思う、6) 強くそう思うを選んで回答してもらった。

本稿では、この不安感に-1 をかけた値を「安心感」として用いている。各回答者の回答から不安感の値（因子得点）を計算し、平均値を取った。図2で示されるように、「次は頑張ろうね」は、0.097 で、最も安心感が高かった。「どうしてできないの」が、-0.176、「罰を課せられた」が-0.224 であった。因子分析によって、全体の平均値は0 となっている。

「次は頑張ろうね」という声かけは、「どうしてできないの」と叱ることや、「罰を課す」ことに比べると、統計的に有意に安心感を高めていることが示された（差の有意確率はそれぞれ、1.1%と2.0%）。「罰を課す」ことも「どうしてできないの」と叱ることも、相対的には不安感を高め、「次は頑張ろうね」という言葉がけが最も安心感を生む。なお、度数は、「罰を課せられた」が153、「どうしてできないの」が263、「次は頑張ろうね」が119であった。

図2 叱る言葉と「安心感」



以上から、「次は頑張ろうね」と励ますことは、「どうしてできないの」と叱るよりも自己決定度と安心感を、さらに「罰を課す」ことよりも安心感を有意に高めるという結果が得られた。

4. ほめる言葉とその影響

罰を課したり、叱ったりすることが、自己決定度を低め、不安感を増すことは直感的な理解と整合的となっている。しかし、褒美を与えたり、褒めたりすることが自己決定度や安心感に与える影響はどのようなのであろうか。

本調査では、子どものときに親に褒められた記憶に関する質問に対する回答を使って、3つの褒められ方で、回答者をグループ分けした。まず、「親にほめられたときの言葉として、“一番記憶に残っている”のは、次のどれに近いですか。」という質問に、「えらいね」や「頑張ったね」を選んだ回答者のグループをそれぞれ「えらいね」のグループ、「頑張ったね」のグループとして定義した。次に、「あなたが小学校から高校までの間で、勉強や運動で、特に良い成績をあげた時に、親の反応はどのようなものでしたか？」という質問で、「褒美をもらった」、「えらい（あるいは賢い）と言われた」、「頑張ったからだよと言われた」を複数回答で選択してもらった。そこで、「褒美をもらった」を選んだ人で、先に定義した「えらいね」のグループにも「頑張ったね」のグループにも属していない人のみを、「褒美をもらった」グループとして定義した。「褒美をもらった」かつ「えらいね」は、「えらいね」として、「褒美をもらった」かつ「頑張ったね」は「頑張ったね」としている。このように選んだ複数のグループに、同じ人が重複して属することはない。以下では、「褒美をもらった」、「えらいね」、「頑張ったね」のグループ間の比較をする。

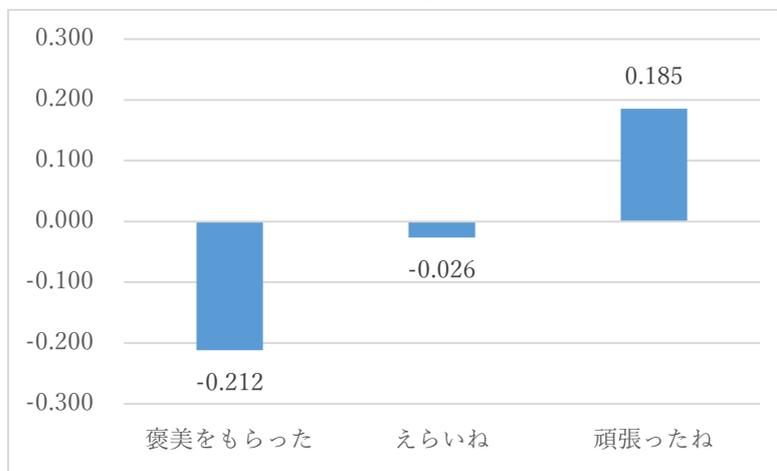
ほめる言葉と「自己決定度」

図3で示されているように、自己決定度を比較すると、「頑張ったね」は、0.185で、最

も自己決定度が高かった。「えらいね」が、0.026で2番目、「ご褒美をもらった」が-0.212で3番目であった。度数は、「褒美をもらった」が79、「えらいね」が137、「頑張ったね」が408であった。

「褒美をもらった」の平均値と「えらいね」の平均値の差は有意ではなかったが、「えらいね」の平均値と「頑張ったね」の平均値の差の有意確率は9.0%で、5%の有意水準では有意ではなかったが10%の有意水準では有意であった。「褒美をもらった」の平均値と「頑張ったね」の平均値の差は1%の有意水準で統計的に有意であった。子どもが勉強で良い成績をとった時に、「褒美を与えること」や子供の能力をほめる「えらい」というほめ方に比べると、努力の過程を評価する「頑張ったね」は、相対的に自立心を育てるほめ方ということになる。

図3 褒め言葉と「自己決定度」

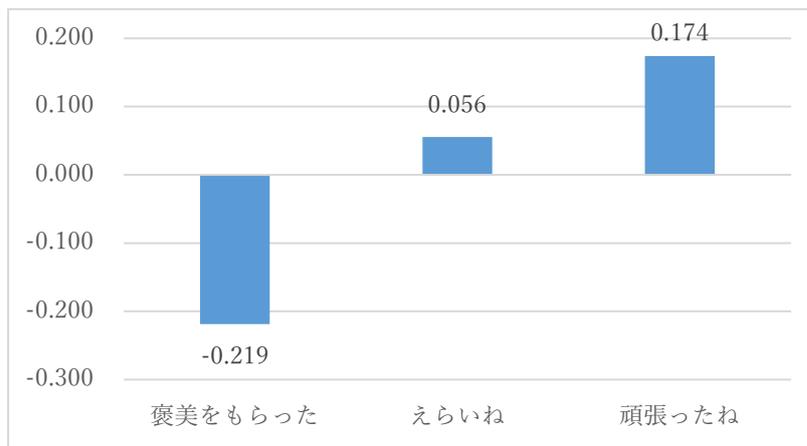


褒める言葉と「安心感」

図4で示されている褒め言葉と安心感の程度との関係において、「頑張ったね」は、0.174で、最も安心感が高かった。「えらいね」が0.056で2番目、「褒美をもらった」が、-0.219で3番目であった。度数は、「褒美をもらった」が138、「えらいね」が259、「頑張ったね」が754であった。

「頑張ったね」の平均値と「えらいね」の平均値の差は有意ではなかったが、「褒美をもらった」の平均値と「えらいね」の平均値の差の有意確率は2.8%で、5%有意水準の下で統計的に有意であった。「褒美をもらった」の平均値と「頑張ったね」の平均値の差の有意確率は0.0%であり、1%の有意水準で統計的に有意であった。褒美を与えることや、子供の能力をほめる「えらい」という言葉がけに比べ、努力した過程を評価する「頑張ったね」は、最も安心感を生むのであろう。

図4 褒め言葉と「安心感」



以上から、「褒美を与える」ことに比べると、「頑張ったね」と努力した過程を評価するほうが、自己決定度と安心感を高めることが分かった。「褒美をもらう」あるいは「えらいね」というのは、他人からの評価に軸をおいて、結果への見返りや褒め言葉で自分を承認するために、動機付けが外発的になり、相対的に自己決定度が低くなるのであろう。「頑張ったね」というのは、結果よりも努力を評価されることで、自己肯定感が高まり、自己決定度や安心感を高めると思われる。

5. 賞罰と「長期的な判断」や「倫理観」

叱ること、罰を与えること、褒めること、褒美を与えることが、長期的な視点で物事を考える習慣に与える影響を分析する。そのために、以下では2ステップに分け、まず、褒めたり叱ったりする仕方と計画立案・実行能力との関係、次に倫理的行動との関係を調べる。双曲割引との関連でいうなら、双曲割引の度合いが強いほど、短期的な利得を得るために、長期的な利得を軽視し、非倫理的行動を引き起こす可能性が高まると予想される (Ainslie, 2011)。賞罰を受けることが成人後の双曲割引の度合いに影響すると考えることもできる。

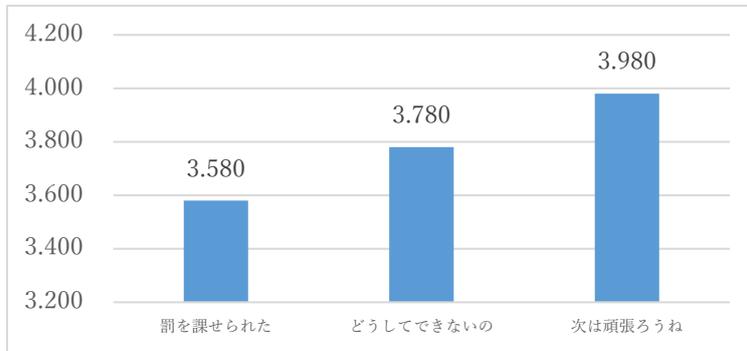
長期的な計画を立てて実行する能力

第1ステップとして、長期的な計画を立てて実行する能力を測るために、「計画をたててやりとおす力」と「目標を設定し確実に行動する力」を訪ねた質問に対する回答を用いる。回答は、1：まったくそう思わない、2：そうは思わない、3：どちらかといえばそうは思わない、4：どちらかといえばそう思う、5：そう思う、6：強くそう思う、の6段階となっている。

まず、「計画をたててやりとおす力」に関しては、図5で示されているように、叱られた時に「罰を課せられた」人の平均値と、「どうしてできないの」と叱られた人の平均値の差は有意でなかったが、「罰を課せられた」と答えた人の平均値は、「次は頑張る

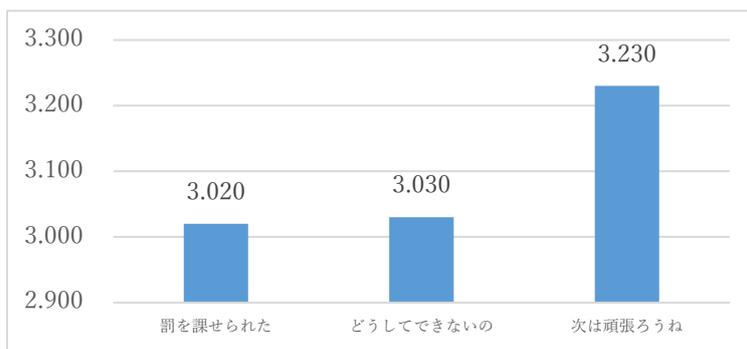
うね」と言われた人の平均値に比べて、1%有意水準の下、有意確率 0.1%で統計的に有意に低かった。なお度数は、「罰を課せられた」が 153、「どうしてできないの」が 263、「次は頑張ろうね」が 206 であった。

図5 叱る言葉と「計画を立ててやりとおす力」



また、「目標を設定し確実に行動する力」も、図6で示されているように、叱られた時に「罰を課せられた」人の平均値は 3.02、「どうしてできないの」と叱られた人の平均値が 3.30 で、「次は頑張ろうね」と言われた人の平均値 3.23 に比べて、どちらも有意確率 3.0%で、5%有意水準の下、統計的に有意に低くなっている。なお度数は、「罰を課せられた」が 153、「どうしてできないの」が 263、「次は頑張ろうね」が 206 であった。

図6 叱る言葉と「目標を設定し確実に行動する力」

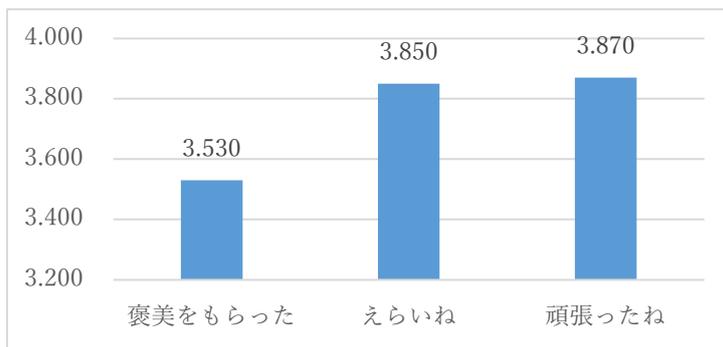


以上から、「罰を課せられた」人は、「次は頑張ろうね」と言われた人に比べて、「計画を立ててやりとおす力」と「目標を設定し確実に行動する力」のどちらも、相対的に弱いことが分かった。

それに対し、褒められた時については、図7で示されるように、「計画を立ててやりとおす力」は「褒美をもらった」と回答している人の 3.53 に比べて、「えらいね」と「頑

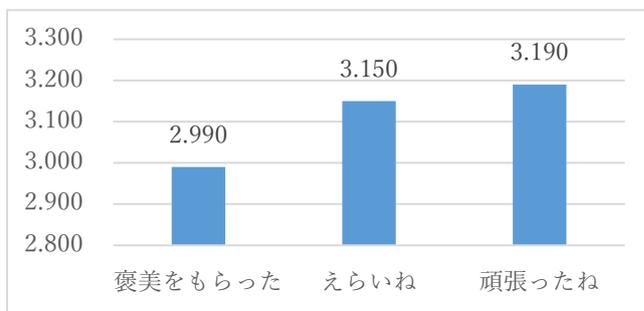
張ったね」と回答している人の平均値は 3.85 および 3.87 となる。「えらいね」の平均値と「頑張ったね」の平均値は、1%の有意水準の下、「褒美をもらった」の平均値より、統計的に有意に大きな値を取っていることが示されている（有意確率はそれぞれ 0.1% および 0.8%）。「えらいね」と「頑張ったね」の差は、5%の有意水準の下、統計的に有意ではなかった。なお度数は、「褒美をもらった」が 138、「えらいね」が 259、「頑張ったね」が 754 であった。

図7 褒める言葉と「計画を立ててやりとおす力」



さらに、「目標を設定し確実に行動する力」に関しても、図8で示されているように、「褒美をもらった」と回答している人の平均値は 2.99 となり、「頑張ったね」と回答している人の平均値 3.19 に比べて、5%の有意水準の下、有意確率 2.3%で統計的に有意に低いことが示されている。「えらいね」と「褒美をもらった」の平均値の差は統計的に有意ではないものの、「褒美をもらった」の平均値が相対的に低い値の傾向にある。「えらいね」と「頑張ったね」の平均値の差は 5%の有意水準の下、統計的に有意ではなかった。なお度数は、「褒美をもらった」が 138、「えらいね」が 259、「頑張ったね」が 754 であった。

図8 褒める言葉と「目標を設定し確実に行動する力」



以上から、「褒美をもらった」と回答している人は、「頑張ったね」と回答した人に比

べて、「計画をたててやりとおす力」と「目標を設定し確実に行動する力」のどちらも相対的に弱い。このことから長期的な視野で判断する力も相対的に弱いと考えられる。

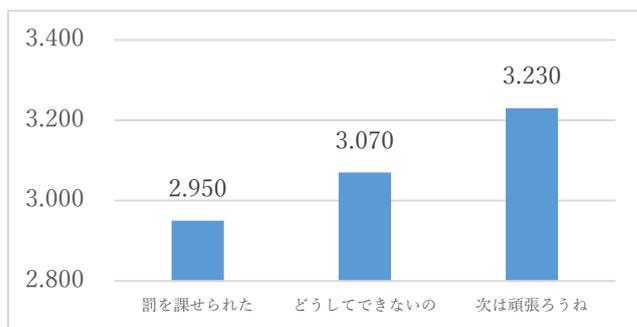
「倫理的行動」との関係性

第2ステップでは、賞罰が倫理的行動に与える影響を調べるために、「法令遵守はいかなる場合でも最優先される」に対する回答を用いる。回答は、1：そう思わない、2：どちらかといえばそう思わない、3：どちらかといえばそう思う、4：そう思う、の4段階となっている。

「法令遵守はどんな場合でも最優先される」に対しては、図9で示されているように、「罰を課せられた」の平均値は2.95であり、「次は頑張ろうね」の平均値3.23と比較して、1%の有意水準の下、有意確率0.6%で肯定度合いは統計的に有意に低くなっている。「次は頑張ろうね」の平均値と「どうしてできないの」の平均値の差は、5%の有意水準の下、統計的に有意ではないものの、「どうしてできないの」の平均値が相対的に低い傾向にある。なお度数は、「罰を課せられた」が138、「どうしてできないの」が230、「次は頑張ろうね」が183であった。

この設問に対して肯定的に回答することは、短期的利得より長期的な利得を重視して、法律を遵守すべしと考えていることを示唆している。逆に、否定的に回答することは、長期的利得より短期的な利得を重視して、法律を守らない場合もあり得ると考えていると解釈でき、「罰を課せられた」と回答した人は、短期的利得を重視することにより、倫理的行動を軽視する傾向になると理解できる。

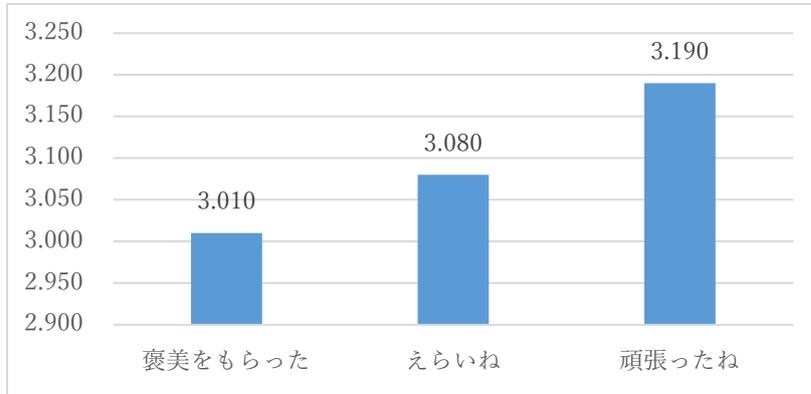
図9 叱る言葉と「法令遵守はどんな場合でも最優先される」



同じ質問に対する褒められた時の回答との関係は、図10で示されているように、「褒美をもらった」の平均値3.01、「頑張ったね」の平均値3.19に比べて低くなっている。この差に関する有意確率は5.3%であり、5%の有意水準では差が無いという帰無仮説を棄却できないものの、10%の有意水準であれば統計的に有意に低くなっていると判断できる。すなわち、「褒美をもらった」は、「頑張ったね」に比して、図7と図8から分かるように、短期的利得を優先させる傾向が強い。それと、図10の「法令遵守はどんな場合でも最優先される」に対する低い肯定度合いは矛盾していない。なお度数は、「褒

美をもらった」が 119、「えらいね」が 238、「頑張ったね」が 683 であった。

図 10 褒め言葉と「法令遵守はいかなる場合でも最優先される」



以上のように、「罰を与えること」と「褒美を与えること」は、「次は頑張ろうね」や「頑張ったね」と比べて、相対的に倫理感の低下をもたらすという結果が得られた。これは、賞罰が双曲割引の度合いを高めることと整合的な結果である。

6. ほめ方、しかり方の総合的評価

叱る言葉のそれぞれの影響の強さを総合的にみるために、変数変換して、図 1、2、5、6、9 の様々な棒グラフで表した異なる単位の指数をそろえたのが図 11 である。なお、「計画を立ててやりとおす力」と「目標を設定し確実に行動する力」については、叱る言葉のそれぞれについて、2 つ値の平均値をとって、「計画実行能力」とよぶ変数を作り、さらにそれを変数変換して新しい値を得た。

図 1、2、5、6、9 の棒グラフのそれぞれの図で、最も高い値が 100、最も低い値が 40 となるように線形変換する。x を変換前の棒グラフの数値、y を変換後の数値、a, b をパラメータとすると、変換式は次式で示される。この変換によって決まるそれぞれの「叱る言葉」の数値が表 2 で示される。

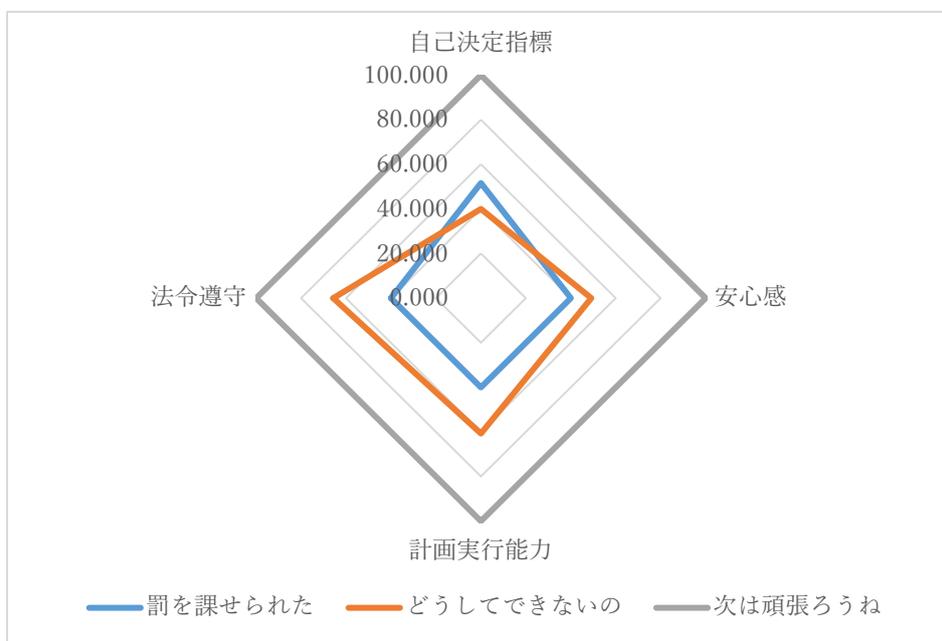
$$y = ax + b$$

表 2 叱る言葉とその影響（変換後数値）

	罰を課せられた	どうしてできないの	次は頑張ろうね	変換パラメータ値	
				a	b
自己決定度	51.583	40.000	100.000	172.875	-74.575
安心感	40.000	49.064	100.000	186.509	-81.834
計画実行能力	40.000	60.656	100.000	196.721	609.180
法令遵守	40.000	65.714	100.000	214.286	592.143

表 2 をレーダー図として示したのが、図 11 である。

図 11 叱る言葉とその影響



棒グラフの値の中には、差が有意ではないものも含まれていたもので、注意してみる必要はあるが、少なくとも、「次は頑張ろうね」という声かけが、他の 2 つに比べて、安心感を高め、自己決定力を引き上げ、長期的な視野を持ち、倫理的な行動を促す傾向があることを否定することはできない。「次は頑張ろうね」という声かけは、人的資本形成期の初期において、良い影響をあたえる、逆に、罰を与えることには弊害がある、と 思ってよいであろう。

次に、褒め言葉を比較した棒グラフの図 3、4、7、8、10 のそれぞれで、棒グラフの最も高い値が 100 となり、最も低い値が 40 になるように数値を変換した値を表 3 で示す。

表 3 褒め言葉とその影響 (変換後数値)

	褒美をもらった	えらいね	頑張ったね	変換パラメーター値	
				a	b
自己決定度	40.000	76.470	100.000	172.675	-67.988
安心感	40.000	81.895	100.000	152.788	-73.415
計画実行能力	40.000	93.333	100.000	222.222	684.444
法令遵守	40.000	63.333	100.000	333.333	963.333

表 3 をレーダー図として示したのが、図 12 である。

図 12 褒め言葉とその影響

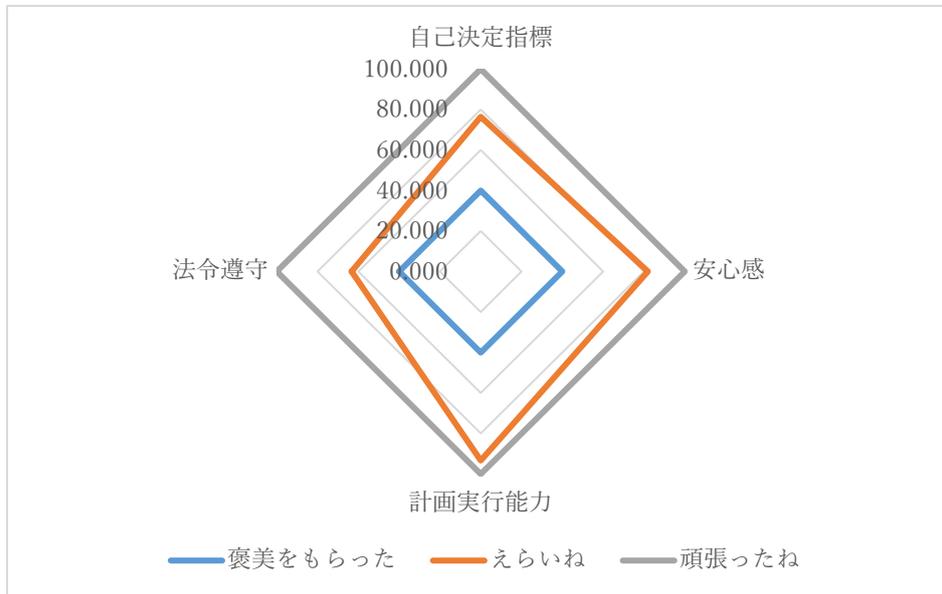


図 12 で示されているように、「頑張ったね」という声かけが、安心感を高め、自己決定力を引き上げ、より長期的な視野をもち、倫理的な行動を促すことを否定はできないであろう。それに対し、「褒美」が、必ずしも良い影響を与えるわけではないことも理解できよう。

これらの結果は、自立心を身につけながら、高い倫理感と計画実行力を持つ人材の育成方法を示唆しており、長期的に生産性を高める政策評価にも重要な意味を持っている。

7. おわりに

我々は、叱ることと、褒めることの成人後の子供に対する影響を調査、分析した。

その結果、親に叱られた時に、「次は頑張ろうね」と励まされたことを記憶している人は、「どうしてできないの」と叱られた人よりも、自己決定度と安心感が最も高かった。「罰を与える」ことは不安感を増すという意味で、良い結果を生まなかった。

親に褒められた場合、「頑張ったね」と努力の過程を認められた人の自己決定度と安心感がともに最も高く、「褒美をもらった」人の自己決定度が最も低かった。また「えらいね」というほめ方は、「頑張ったね」と比べると、自己決定度が低かった。

これらの結果は、西村、八木 (2016) および Nishimura and Yagi (2017) で得られた結果と関連させて議論することが可能である。そこでは、子育て方法が子どもを見守りながら支援する「支援型」である場合に、学歴、労働市場での稼得能力、前向き思考、安心感が最も高くなり望ましい子育て方法であることが示された。子どもに指示を与え

厳しく管理する「厳格型」よりも「支援型」が学歴、稼得能力、前向き思考、安心感を高めるという結果は、結果よりはプロセスを重視する声かけの方法である「次は頑張ろうね」、「頑張ったね」において、「罰を与える」とか「褒美を与える」といった結果重視の声かけ方法よりも、自立性と安心感を高めることと整合的であると言えよう。このような意味において、声かけの方法は、家庭内での教育方針といった要素を反映していると考えられる。

本論文では、さらに、長期的な視点で物事を考える習慣や倫理的行動に与える影響を調べた。「罰を与えること」と「褒美を与えること」は、「次は頑張ろうね」や「頑張ったね」と言われるのと比較して、長期的な視点で物事を考える習慣や倫理的行動を低下させるという結果が得られた。これは、行動経済学における双曲割引の度合いを高めることと整合的な結果である。賞罰が、双曲割引の度合いを高め、遠い将来よりも直近の利得を強く意識するような影響を与えるとも解釈できる。

本研究結果は、双曲割引との関連のみならず、損失回避および意思決定能力との関係においても解釈を深める必要がある。罰は損失回避性向を高めると考えられ、褒美は長期的な視野での意思決定よりも短期的視野での意思決定を強めると考えられる。どのようなメカニズムによって、叱り方および褒め方が能力形成に影響を与えるのかについては、認知能力の形成および非認知能力形成の形成それぞれについて詳細に分析を深めることが今後の研究課題として残されている（鶴他（2019）、安井他（2020）参照）。

ここでは分析しなかった課題に、叱り方、褒め方が、所得や学歴にどのように影響するかを調べるということがある。しかし、罰を受けたり、叱られた記憶のある人は、もともと物事の達成度が低いため、所得や学歴が低くなっているという可能性、褒美をもらったり、褒められた記憶のある人は、もともと物事の達成度が高いため、所得や学歴が高くなるという可能性があるため、叱り方、褒め方がどの程度影響しているかを分離して評価することは難しい。これまでの研究から自己決定度や安心感自体が、仕事や学業に良い影響を与えることは、容易に想像できることであり、叱り方や褒め方も、やはり、所得や学歴に影響すると考えられる。しかし、それを直接的に分析することは、今後に残された課題である。

参考文献

- Ainslie, G. (1991), "Derivation of 'rational' economic behavior from hyperbolic discount curves", *The American Economic Review*, 81(2), 334-340.
- Ainslie, G. (2011), "Free will as recursive self-prediction: Does a deterministic mechanism reduce responsibility?", *Addiction and Responsibility*, 55-87.
- Angeletos, G. M., Laibson, D., Repetto, A., Tobacman, J. and Weinberg, S. (2001), "The hyperbolic consumption model: Calibration, simulation, and empirical evaluation", *Journal of Economic Perspectives*, 15(3), 47-68.
- Aunola, K. and Nurmi, J. E. (2005), "The role of parenting styles in children's problem behavior",

- Child Development*, 76(6), 1144–1159. <https://doi.org/10.1111/j.1467-8624.2005.00840.x-i1>.
- Baumrind, D. (1967), “Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior”, *Genetic Psychology Monographs*, 75(1), 43-88.
- Baumrind, D. (1968), “Authoritarian vs. authoritative parental control”, *Adolescence* 3, 255-272.
- Brummelman, E., Crocker, J., Brad, J. and Bushman, B. J. (2016), “The Praise Paradox: When and Why Praise Backfires in Children With Low Self-Esteem”, *Child Development Perspectives* 10(2), DOI:10.1111/cdep.12171
- Cole, L. M., Maliakkal, N. T., Jeleniewski, S. A., Cohn, E. S., Rebellon, C. J., and Van Gundy, K. T. (2021), “The Differential Effects of Parental Style on Parental Legitimacy and Domain Specific Adolescent Rule-Violating Behaviors”, *Journal of Child and Family Studies*, 1-18.
- Dreikurs, R. (1958), “The Cultural Implications of Reward and Punishment”, *International Journal of Social Psychiatry* 4: pp. 171-178.
- Hills, P. and Argyle M. (2002), "The Oxford Happiness Questionnaire: A compact scale for the measurement of psychological well-being." *Personality and Individual Differences* 33, No.7. 1073-1082.
- Hoeve, M., Blokland, A., Dubas, J., Loeber, R., Gerris, J. M., and Van der Laan, P. H. (2008), “Trajectories of delinquency and parenting styles”, *Journal of Abnormal Child Psychology*, 36(2), 223–235, <https://doi.org/10.1007/s10802-007-9172-x>.
- Hoeve, M., Dubas, J. S., Eichelsheim, V. I., Van der Laan, P. H., Smeenk, W., and Gerris, J. R. (2009), “The relationship between parenting and delinquency: A meta-analysis,” *Journal of Abnormal Child Psychology*, 37(6), 749–775, <https://doi.org/10.1007/s10802-009-9310-8>.
- Kohn A. (1993), *Punished by Rewards: The Trouble With Gold Stars, Incentive Plans, A's, Praise, and Other Bribes*, Houghton Mifflin. アルフィ・コーン『報酬主義をこえて』法政大学出版局、2011、田中英史（訳）
- Laibson, D. (1997), “Golden eggs and hyperbolic discounting”, *The Quarterly Journal of Economics*, 112(2), 443-478.
- Lee, H. I., Kim, Y., Kesebir, P. and Han, D. E. (2016), “Understanding When Parental Praise Leads to Optimal Child Outcomes: Role of Perceived Praise Accuracy,” *Social Psychological and Personality Science*, 1-10, <https://doi.org/10.1177/1948550616683020>
- Maccoby, E. E., and Martin, J. A. (1983), “Socialization in the context of the family: Parent-child interaction”, In P. Mussen (Ed.) *Handbook of Child Psychology* 4, New York: Wiley.
- McKay, G. D. and Dinkmeyer, D. C. (1989), *The Parent's Handbook: Systematic Training for Effective Parenting*, American Guidance Service.
- Mueller, C. M., and Dweck, C. S. (1998), “Praise for intelligence can undermine children's motivation and performance,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 75(1), 33–52.
- Nishimura K. and Yagi, T. (2017), “How Parenting Affects Children’s Futures: Empirical Study in Japan,” *Journalism and Mass Communication* 7, issue 1, 35-45. 2017,

- Nishimura K. and Yagi, T. (2019), "Happiness and Self-Determination – An Empirical Study in Japan", *Review of Behavioral Economics* 6, No. 4, pp 385-419.
- Ryan, R. and Deci, E. (2000), "Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being." *American Psychologist* 55, 68-78.
- Smetana, J. G. (2017), "Current research on parenting styles, dimensions, and beliefs", *Current Opinion in Psychology* 15, 19-25.
- Soenens, B. and Vansteenkiste, M. (2005), "Antecedents and Outcomes of Self-Determination in 3 Life Domains: The Role of Parents' and Teachers' Autonomy Support," *Journal of Youth and Adolescence* 34, 589–604.
- Stormshak, E. A., Bierman, K. L., McMahon, R. J. and Lengua, L. J. (2000), "Parenting Practices and Child Disruptive Behavior Problems in Early Elementary School," *Journal of Clinical Child Psychology* 29, 17–29, doi: 10.1207/S15374424jccp2901_3
- 鶴 光太郎、久米 功一、佐野 晋平、安井 健悟「学校や職場での教育訓練、スキルの実態に関する研究—RIETI 「全世代的な教育・訓練と認知・非認知能力に関するインターネット調査」から」RIETI DP 19-P-035、独立行政法人経済産業研究所、2019年12月
- 西村和雄、八木匡「子育てのあり方と倫理観、幸福感、所得形成。－日本における実証研究－」RIETI DP 16-J-048、独立行政法人経済産業研究所、2016年7月
- 安井 健悟、佐野 晋平、久米 功一、鶴 光太郎「認知能力及び非認知能力が賃金に与える影響について」RIETI DP 20-J-024、独立行政法人経済産業研究所、2020年4月